

下伊那のウチダザリガニ

下伊那支部 仲村信治 (和合小)

1 はじめに

ウチダザリガニは1920年代の食料難の時代に、食用として北米から日本の各地に移入された。



ウチダザリガニという名前は日本の生物のようだが、名前の由来はウチダザリガニが日本で発見された際、どの種に属するかを調べるときに、北海道大学の分類学者であった、内田亨教授の標本が役立ったためウチダザリガニと名付けられている。

ウチダザリガニの英語の名前は、一般にシグナルクレイフィッシュと呼ばれ、ウチダザリガニの特徴である大きなハサミに白い模様があり、ザリガニがハサミを振り上げる動作が、信号(シグナル)を送っているように見えるためと言われている。

ウチダザリガニは外来種でも、地域の自然環境に大きな影響を与え、生物多様性を脅かすおそれがあるので、現在は特定外来生物に指定されている。特定外来生物法では許可なく持ち出したり飼育することが規制されている。

環境省の2009年のデータによると、現在は北海道、滋賀県、福島県の冷涼な河川や湖沼に帰化・定着が確認され、生息地は増加の傾向にある。2010年4月には千葉県利根川水系で初めての生息が確認され、昨今では福井県の九頭竜ダムでも発見が報告された。

長野県では、安曇野市の用水路に1920年代頃から生息していることが確認されている。しかし、2013年頃

から片桐松川ダム、矢筈ダムなど下伊那地域でもウチダザリガニが確認されるようになってきた。



筆者が所属している下伊那教育会郷土調査部陸水委員会には8名の教職員が所属し、2013年よりウチダザリガニの調査研究を進めている。

2 分布調査と調査地

ウチダザリガニは冷水やきれいな水を好む生態から、標高が高いダム湖と、ブラックバスの餌にもなることからバスが確認されている主な下伊那の湖沼、拡がり調を調べるために天竜川本流支流の調査を行った。

調査は、費やせる時間により合計3~10個、5~10mくらいおきに1個ずつもんどりを夕方仕掛け朝方に入るか調べた。



調査方法：もんどりを夕方仕掛け、朝方回収

〈調査地〉

- ①片桐松川ダム、②片桐松川10ヶ所、③小渋ダム、④飯田松川ダム、⑤天竜川本流支流、⑥小川2ヶ所、⑦矢筈ダム、⑧大ぐて湖、⑨深見の池、⑩岩倉ダム、⑪平岡ダム



3 分布調査結果

片桐松川ダムと矢筈ダムの2ヶ所で2013年~2015年確認されている。

また、2015年の調査で新たに下伊那地域の野池で捕獲確認がされている。



片桐松川ダム



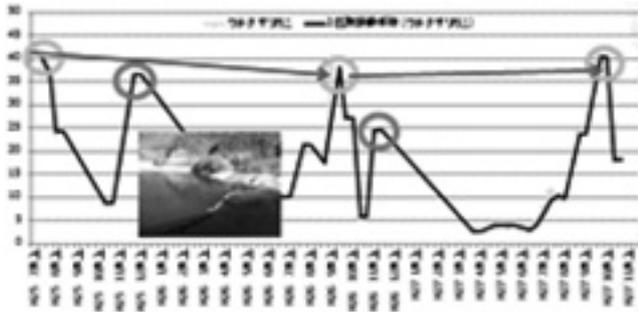
2015年 新たに発見!



矢筈ダム

4 片桐松川ダムでの調査結果 (H25～H27)

下伊那で最初にウチダザリガニが発見された片桐松川ダムは標高900mにある。松川町の上水道や田畑への利水のために平成元年に作られた。水温は、夏場でも22～23℃の冷水性の山上湖である。

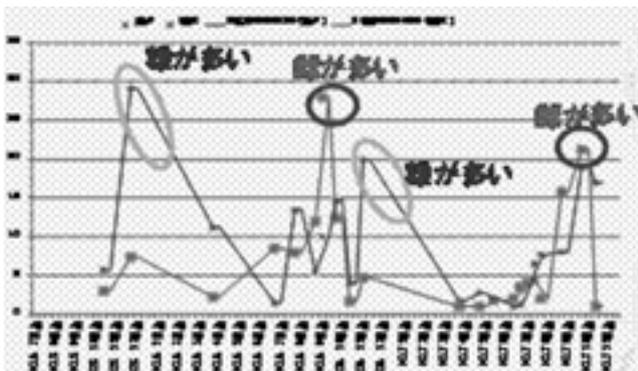


片桐松川ダムの採捕数の推移 (H25～H27)

これは、平成25年7月から平成27年10月までの調査をまとめたものである。全体の網1個あたりの採捕数を見てみると、片桐松川ダムは夏場が一番活発にエサを追い求め捕獲数が多くなる。また、11月頃の調査でたくさん捕獲でき、それは土砂をとるために水を抜くため、ウチダザリガニが集まってきたからだと考えられる。ダムの水位は3mほど下がる。

また、ここ3年間を見ると、ダム湖のウチダザリガニの個体数は大きな増減なく推移している。ダム湖の中のウチダザリガニが飽和状態になっているのか、そのため下流域へ広がっているのか、今後の継続した調査が必要となる。

片桐松川ダムの雌雄の採捕数の推移を見ると、夏場にかけて、一時雌の採捕数が雄の採捕数を上回っている。



片桐松川ダムの雌雄の採捕数の推移 (H25～H27)

夏にウチダザリガニが多く捕獲できるのは、雄、雌ともに餌を求めて活発に動くことが考えられる。また、夏から秋にかけて雌は抱卵し、活発に餌を追い求めないので、捕獲数が減ると考えられる。

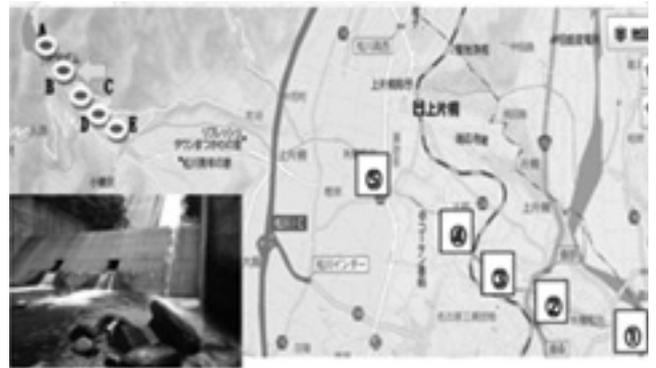


抱卵した雌

飼育調査から抱卵した雌は、単独で巣にしている缶に入りあまり出てこず、ウチダザリガニの雌は抱卵するとあまり動かなくなる。季節により雌雄の採捕数に変化が見られたのはこのためだと考えられる。

雌は秋口になると卵を抱え、5月くらいに卵がかえる。その間、雌は卵を守るためかあまり動かない。個体差もあるが、卵の数はおよそ400くらい。飼育してみても立証されることも多い。ウチダザリガニの寿命は長いもので15年を超え、平均は5年程度と言われている。

片桐松川ダムの下流域の拡がりの調査では、A～Eの5か所で調査をした。ダム堰堤直下のBでは大量に捕獲できたが、C、D、Eでは捕獲できなかった。また、片桐松川下流①～⑤でも捕獲できなかった。夏場の高水温、干上がりが考えられるが、大きな拡がりはない。さらに、今後の継続した調査が必要である。



片桐松川ダムの下流域の拡がり (H25～H27)

5 矢筈ダムでの調査結果 (H25～H27)

矢筈ダムで新たに発見されたウチダザリガニは松川ダムのもものと見た目にも異なるので、弘前大学の専門家に精査を依頼。寄生するヒルミミズにより、どこの地域から持ち込んだのかが分かり、矢筈ダムのウチダザリガニは、片桐松川ダムのウチダザリガニとは種類

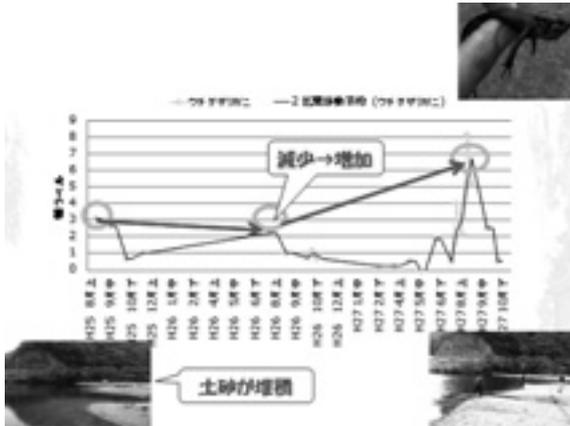
が違うことが分かった。矢筈ダムにいるウチダザリガニは、長野県安曇野市明科の個体群と北海道の種の個体群に寄生しているものが共生している、日本で初めての個体群であることが判明した。



標高850mの山上湖



矢筈ダム下流域の拡がり (H25~H27)

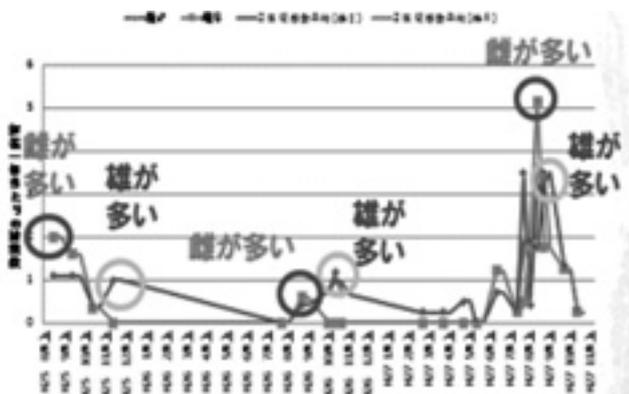


矢筈ダムの採捕数の推移 (H25~H27)

矢筈ダムでウチダザリガニが捕獲確認後、およそ1か月ごとその個体数がどうなっているか、平成25年8月から27年10月まで経過観察を行っている。矢筈ダムでの捕獲数は少なく、ウチダザリガニが小さい時にイモリの餌になっていることが予想される。また、年々ダム湖の改修工事が行われていることも影響していると考えられる。昨年の減少傾向から今年は増加傾向にある。

矢筈ダムの雌雄の採捕数も片桐松川ダムと同じ傾向がみられる。

矢筈ダム下流域1, 2の調査では、特定外来生物のブルーギルのみでウチダザリガニは捕獲されていない。今のところ下流域へは拡がっていないと推測できる。



矢筈ダムの雌雄の採捕数の推移 (H25~H27)

6 飼養調査



飼育観察では、水温と個体密度について調査を行った。ウチダザリガニは冷水性ということであるが、26℃でもある程度活発に生き延びることや個体密度が大きくなると死滅するのではないかとことも分かった。また、巣穴の確保のために追い出す行動やイクラをハサミでつまんで食べる様子も観察された。

7 まとめ

調査研究成果

- ① 下伊那地域でウチダザリガニの生息域は拡大している。
 - ② 飼養より生息には巣穴が必要であることや巣穴数と個体密度が関係している。
 - ③ 冷水を好むが、水温26℃で活発に動くことから、ある程度高い水温でも生息できる。
 - ④ 魚類の卵を食べることから、水草の産卵場所を荒らす。
- 水温の高い平地の湖沼や下伊那南部地域への拡がり
が心配される。

今後の調査研究

- ① 定着箇所での個体数の継続調査
- ② 新たな水域へのウチダザリガニ調査
- ③ 飼育を通しての生息環境の解明
- ④ 生態系への影響に関するデータ収集
- ⑤ 特定外来生物の理解と啓発活動